

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.106 Jun. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34  
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」  
Tel.078-911-1671  
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員  
発行日 2023年6月10日  
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

## 『季刊 歴史と文学』に連載した13編 『中国史随想 風を観る』

本号では、『風を観る』(2001 毎日新聞社)を取り上げました。初出は、『季刊 歴史と文学』第15巻(1976年秋号)～第26巻(1979年夏号)、第29巻(1980年春号)です。下に紹介した同著「あとがき」にあるように、学者や作家を念頭に書いたエッセイなので相当、気合いが入っています。(編集委員 橋雄三)

『風を観る』「あとがき」抜粋引用  
傍線、小見出しは編集委員の加筆

知力・体力が充実していた五十代

いつのまにか私は喜寿をすぎた。今思い返してみると、知力が円熟の域に達し、体力もまだ衰えをそれほどかんじていなかったのは、五十代であったような気がする。仕事も余裕をもってすることが出来た。

満五十歳になったのは、一九七四年であり、この年の一月には『サンデー毎日』に『小説十八史略』の連載を開始した。同時に『週刊朝日』と『週刊読売』にも、一月号から小説を連載している。月刊誌の『オール讀物』に『秘本三国志』を連載しはじめたのも、この年の一月号からだった。しかもこの年の九月から十月にかけて、中国各地を四十数日にわたって旅行している。旅行中は一切原稿を書いていない。十一月から始まる新聞小説『旋風に告げよ』の構想を練っていたのである。我ながらよくもこんなに仕事をしたものだと思えばかりだ。しかも、仕事をすらいと思っただけはなかった。考えてみると、適当に遊んでいたのである。

年四度、京都での楽しい語らい

遊ぶといっても、仕事がらみで、京都へよく行った。仲間と集まって、座談会のようなことをした。奈良本辰也、会田雄次、原田伴彦、邦光史郎の諸氏と「歴史と文学の会」という会をつくり、のち

には辻邦生、山崎正和、野口武彦たちも参加したように思う。

定期的に集まるのは年に四度で、それを記録したり同人の文章を載せたりする『歴史と文学』という季刊誌があった。

季刊誌の版元は、三一書房、講談社、平凡社と転々とした。座談会はたいいてい京都で、おもに祇園なので会のあとの料理や酒がたのしみであった。

季刊誌というべきか同人誌というべきかわからないが、『歴史と文学』は、いわゆる商業誌ではないので、売れるということを考慮しなくてよかった。中国を舞台にした小説は、日本では早くから市民権を得ていたが、インドもの、とくに長篇は出版社でもかんとんにひきうけないと思えた。それで私はインドのムガル朝表亡の歴史を『歴史と文学』に連載することにした。これを一冊にまとめたのが『インド三国志』で一九八四年に平凡社から出た。いまは講談社文庫にはいつている。

『風を観る』の十三編は

このようにしてできた

連載小説のほかに、私はエッセイも『歴史と文学』に連載した。じつは私たちの会は、毎号それぞれテーマをきめて、私はそれに沿ったエッセイをかき、また同人たちがそのテーマで座談会をするのである。

会合はあとのほうで、「つきはなにをテーマにしようか？」という話になる。「スパイがおもしろいのじゃないか」

「このあたりで女性の話はどうかだろうか？」といったテーマの候補があたり、「じゃ、スパイにきめよう」と結論が出る。つぎの会までに三ヶ月あるので、そのあいだ心がけて座談会にそなえる。私はおもに中国史からスパイの話拾いあげて、エッセイを書くことになる。本書の「間諜」というタイトルをもつ文章は、こうして誕生したものである。この種のエッセイをここに集めた。

「風を観る」とは人情や風俗を観ること

NHKのシルクロード取材に同行して、終点のローマまで行ったり、中国の通史十五巻『中国の歴史』を書きあげたり、それでも京都でたのしく遊んだ歳月であった。

観光とは景色を観ることで、観風とは人情や風俗を観ることである。画人はもっぱら観光して筆をふるい、文人は観風して筆をとる。ここにおさめたエッセイは脈絡はないようだが、めざすところは人間の心とその表現である。

二〇〇一年一月

陳舜臣



表紙

# 『風を観る』 内容(1) 及び補足

章	題	各章内容 ■はキーワード
第一章	長沙の王	長沙馬王堆漢墓は1972年から1974年にかけて発掘され、その一号墓から出土した棺から「生けるが如き貴婦人(軟侯夫人)」の遺体が発見され話題になった。ここで、初代軟侯・利倉とは、そして、利倉が補佐したと思われる初代長沙王・呉芮とはどのような人物だったのかを『史記』、『漢書』などを繙き、陳舜臣さんの推察を交え詳述する ■黥布 項羽 劉邦
第二章	漢帝国の後妃たち	「中国史で最も権力をふるった女性は、漢の呂后、唐の武則天、清の西太后の三人であろう」とし、この章では呂后に言及する。1~3節では、呂后は、夫・劉邦が愛した戚夫人、更に、夫がほかの女性に産ませた皇子たちを死に追いやり、劉邦の意向でもあったというのが、建国の功臣を次々粛清した。4節では、漢の文帝の時代から説き起こし、武帝の2番目の皇后、衛子夫を中心に記述する。衛子夫は、極めて低い出身ながら、武帝に見初められ皇后にまでなった。衛皇后の弟・衛青及び甥・霍去病は共に匈奴を討った將軍として有名
第三章	仕えざる人々	歴代中国王朝にあって、「仕える」とは、官吏(わかりやすくいえば、官はエリート官僚で、吏はノンキャリア組)となって、統治機構に参加することである。この章では、その逆、「仕えざる人々」について記述する。①学問の在る人を「士」といい、まだ仕えない、仕えられない「士」を「処士」というが、「仕えざる人々」のなかには、処士が多かった(■処士横議)。②官吏に非ずんば人に非ずという社会にあって、官にありながら、そこから外れる、外れようとする例外もあった。「帰りなんいざ」の陶淵明のようなケース、父母を亡くした官吏が数年、職を退く「丁憂守制」(■林則徐 曾國藩)などである。その他、テーマから少しずれるが、「こまごました実務にたずさわってきた吏がつくった」漢王朝について記述する
第四章	造反と帰順と	この章のキーワードは「悪党」である。悪党とは、威勢が強く、反体制か、もしくは体制の中核から遠いところにある人物、および彼に率いられた集団である。悪党が成功すれば、新王朝を創始して、「至尊」の地位にのぼり、失敗すれば乱戦で殺されたり、叛徒として刑場の露と消える。陳舜臣さんは、成功した悪党として、漢の劉邦、明の朱元璋をあげる。そして、「悪党」存在の条件は、「食べていける」、自立できる経済的基盤を有することといい、まず、『水滸伝』の梁山泊に言及する。梁山泊では、水郷地帯の運送業、漁師などを「なりわい」として、将兵、雑役、家族など数万の人間を養ったという。『水滸伝』には、造反と帰順、二つの時期があるが、陳さんは、帰順後の梁山泊が楠正成流の悪党にあたるという。あと、方臘の乱の方臘(ほうろう)、太平天国などにふれ、最後、「悪党」の典型として方国珍について詳述する

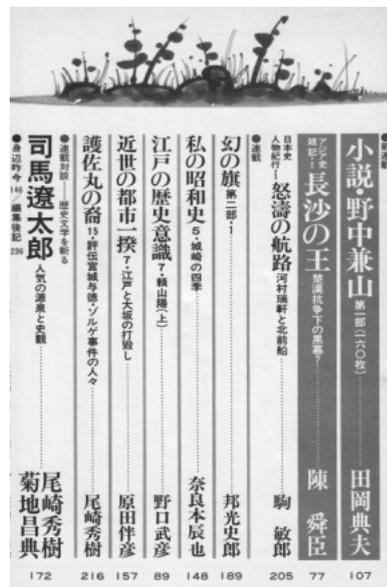
掲載誌『季刊 歴史と文学』

第一章「長沙の王」補足

『風を観る』の初出は、『季刊 歴史と文学』第15巻(一九七六年秋号)〜第26巻(一九七九年夏号)、第29巻(一九八〇年春号)です。

そして、前頁で取り上げました『風を観る』

「あとがき」で、陳舜臣さんが、『歴史と文学』は、いわゆる商業誌ではないので、売れるということを考慮しなくてよかった」と、おっしゃっているとおおり、収録作品はどれも、高名な学者、評論家、作家を念頭に書かれたエッセイで、気合いが入った骨のある内容となっています。



「風を観る」の初出は、『季刊 歴史と文学』第15巻(一九七六年秋号)〜第26巻(一九七九年夏号)、第29巻(一九八〇年春号)です。

そして、前頁で取り上げました『風を観る』



右の画像は第15巻の表紙

右の画像は第15巻目次の一部

「風を観る」の初出は、『季刊 歴史と文学』第15巻(一九七六年秋号)〜第26巻(一九七九年夏号)、第29巻(一九八〇年春号)です。

そして、前頁で取り上げました『風を観る』

「あとがき」で、陳舜臣さんが、『歴史と文学』は、いわゆる商業誌ではないので、売れるということを考慮しなくてよかった」と、おっしゃっているとおおり、収録作品はどれも、高名な学者、評論家、作家を念頭に書かれたエッセイで、気合いが入った骨のある内容となっています。

「風を観る」の初出は、『季刊 歴史と文学』第15巻(一九七六年秋号)〜第26巻(一九七九年夏号)、第29巻(一九八〇年春号)です。

そして、前頁で取り上げました『風を観る』

「あとがき」で、陳舜臣さんが、『歴史と文学』は、いわゆる商業誌ではないので、売れるということを考慮しなくてよかった」と、おっしゃっているとおおり、収録作品はどれも、高名な学者、評論家、作家を念頭に書かれたエッセイで、気合いが入った骨のある内容となっています。

『風を観る』 内容(2) 及び補足 ■はキーワード

第五章	すき かい 数寄と怪	数寄は日本の造語。陳舜臣さんは、中国史上、最も大きなスケールでそれをやったのは北宋の徽宗だという。彼は、数寄をこらしすぎて国をほろぼしてしまった。また、「奇異非常日怪」とし、清の中葉、揚州を拠点に活躍した八人の怪(非正統、反正統)画家、「揚州八怪」に言及、支持者、馬日琯、馬日潞兄弟も怪にかぞえてよいとする。ついて、陳さんは、揚州八怪の一人金農と八怪の支持者馬兄弟を清の黄金期の数寄の代表者と見なす。こうなると、きちっと重なるか、ずれるかは別にして、日本語の「数寄」と中国語の「怪」はダブル。あと、日本の「数寄」者、千利休、本阿弥光悦、小堀遠州、北大路魯山人、清初の「怪」李漁、食道楽の「怪」燕枚に言及 ■徽宗(きそう)の花石綱
第六章	間諜	孫武は、「彼を知り、己を知れば、百戦して殆(あやう)からず」と説き(『孫子』)、さらに、知る方法は「用間」篇で、「頼るべきは、ただ人間による敵情報である」としている。ここで、「間」とはスパイのことである。「間諜」という語は、漢の時代に著わされた『淮南子』や『史記』に確認できる。あと、明代、永楽帝の時代にできた皇帝直属の特務機関「東廠」に言及し、続いて、西廠、錦衣衛について記述する ■李牧 王翦 宦官 魏忠賢 鄭和 藍衣社 戴笠
第七章	人間鑑定家たち	1及び2節、春秋時代の秦の穆公はよく人物を鑑定し、家臣をはじめ、人の心を収攬するのにすぐれていた。しかし、彼が死んだとき、半ば強制で多数の殉死者を出した。『史記』はこれについて批判的記述を残している。3節、司馬遷が益州刺史任安に与えた返書、「任安少卿に与うる書」に言及 4節では後漢の郭林宗について詳述。陳舜臣さんは、彼の人物評論に対し、毒蛇や虎狼を恐れるように、あちこち逃げ道をつくっていると評価が低い。5節では、後漢末から三国にかけての時代の許劭(きょしょう)をとりあげている。許劭は、「清平の姦賊、乱世の英雄」と曹操の人物鑑定をしたとして有名 ■月旦(げつたん)
第八章	『三国志』を座右に置いて	陳舜臣さんは、『秘本三国志』を1974年1月号~77年3月号、『オール讀物』に連載した。この間、月末月初、座右に『三国志』と『資治通鑑』が置かれたという。1及び2節では、『三国志』の、いわゆる『魏志倭人伝』に関連し、「邪馬臺国」か「邪馬壹国」か、蘊蓄が語られる。3節、地名比定について、文字の次は音である。この節は興味深い。「『唐詩選』などの古い詩を現在の北京語で詠みあげてもあまりかんじは出ないのである」。陳さんの中国語古代音についての記述は、『弥縫録』「青天の霹靂」にもある(本通信No.103)

第六章「間諜」補足

「間諜」から抜粋引用します。

永楽帝は「東廠」を設けた。皇帝直属の特務機関にはかならない。永楽帝はこの東廠の長官に、宦官をあてた。

永楽帝が東廠を設置して以来、ときに西廠が設けられたり、内廠、外廠と称された時代もあり、短期間だが、廃止された時期もあった。

『明史』刑法志に、  
—— 專以酷虐鉗中外、而廠衛之毒極矣。  
と総括している。廠と衛の毒の極まれるものどあるが、廠は東廠のことであり、衛とは錦衣衛のことだった。東廠が特務機関であるとするれば、錦衣衛は近衛軍兼憲兵隊といえるだろう。ただし、錦衣衛は宦官の職ではない。皇族の縁者、国家元勳の子孫など、いわば貴族の子弟で組織されている。皇帝や皇后の護衛をも任務としていた。

『成化十四年都に咲く秘密』

明朝第九代成化帝の十四年の北京を舞台に描く、二〇二〇年の中国テレビドラマ『成化十四年都に咲く秘密』は非常によくできた作品です。



手前が唐泛、後ろが隋州

【主な登場人物】

●唐泛(たうはん) 都の行政機関順天府の役人。民事・刑事訴訟を取り扱う推官。従六品。類まれな推理力を発揮、事件を解く

●隋州(ずいしゅう) 大叔母が皇太后。武術にたける錦衣衛北鎮撫司総旗

※錦衣衛の長は都指揮使。総旗はその部下

唐泛、隋州の二人がタッグを組む事件に挑む

●汪植(わんせき) 宦官。敵か味方か気になる西廠の長。この時代、皇帝の信頼は東廠より上

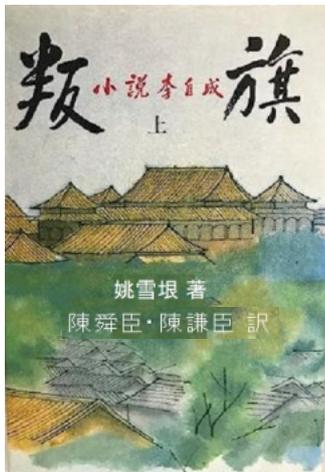
●尚明(しょうめい) 宦官。東廠の長。西廠の汪植を目の敵にする

このドラマには、第六章「間諜」記述の「東廠」、「西廠」、「錦衣衛」などのほか、第十一章「日本刀と馬」に記述のある、オライートや馬市のことも絡んできます。

## 『風を観る』 内容(3) 及び補足 ■はキーワード

第九章	『李自成』をめぐって	「二週間ばかりのアメリカ旅行に、北京から送ってもらった姚雪垠(ようせつこん)の『李自成』をたずさえて行くことにした」という記述ではじまる。該書は文革以後はじめて書店にならべられた本格的長篇歴史小説で、1982年、弟・陳謙臣との共訳で、『叛旗—小説李自成(上)(下)』として講談社から出版された。陳舜臣さんの数少ない翻訳本である ■『風よ雲よ』
第十章	旅の話	この章の題の「旅」とは、陳舜臣さんご自身の旅という意味。陳さんは1978年の8月末から9月にかけて広西省への旅をされた。旅の一番の目的は、『中国やきもの紀行 景德鎮の旅』の取材であった。まず、北京から武漢、長沙経由で南昌まで三十六時間、列車の旅をし、南昌から車で景德鎮へ。そのあと、廬山を訪れた。この度の途次、太平天国軍が武漢の長江にかけた「浮橋」に言及し、廬山では白居易を連想 ■中国裏社会のシンジケート、紅幫・青幫
第十一章	日本刀と馬	特に明代、中国は日本から刀剣を買い(勘合貿易)、モンゴル族から馬を買っていた。日本の刀剣、モンゴルの馬、ともに進貢の形をとっていたが、明にとっては大きな財政負担であった。しかし、倭寇を抑え、モンゴル軍の南下を阻む懐柔策でもあった ■和蕃公主 澶淵(せんえん)の盟 オイラート 土木の変
第十二章	聖火をささげて	題名「聖火をささげて」は、ゾロアスター教の信仰を護ってという意味。ゾロアスター教を国教とするササン朝ペルシャは642年、アラブ・イスラム軍団にネハーヴァンドに敗れ、やがて滅亡した。ゾロアスター教のことを、中国では「祆教」というが、祆教は、すでに南北朝のころから、陸路、主に北朝の北齊や北周に伝わっていた。これは、ササン朝滅亡以前のことである。広州、海南島ほか、中国南方のペルシャ人は、もちろん海路によったのであろうが、陸路の人たちより、遅れて来たと思われる。グジャラート地方ほか、インドに移り住んだペルシャ人はパルシイーと呼ばれるが、あと、パルシイー族について詳述される
第十三章	インド旅行にて	陳舜臣さんは、『季刊 歴史と文学』に『インド三国志』を、舞台を見ずに執筆、連載された。1979年12月、インドへ旅行して、自分の書いた小説の舞台を、初めて見ることになる。そして、「インドを見ていなかったわりには、かなりうまくイメージをとらえていたと、手前味噌ながら、いささか感心したほどである。ただ、シャー・ジャハーンがとじこめられていた場所は、思っていたよりずっと明るいところだった」とおっしゃっている

講談社版『叛旗 小説李自成 上』表紙



第九章「『李自成』をめぐって」補足

姚雪垠(ようせつこん)著『李自成』第一巻は、一九八二年、弟・陳謙臣との共訳で、『叛旗—小説李自成(上)(下)』として講談社から出版され、第20回日本翻訳文化賞を受賞した。

姚雪垠『李自成』は、前掲書の徳間文庫版刊行時(一九九二年)、すでに、第一巻(二分冊)、第二巻(三分冊)、第三巻(三分冊)まで出版され、第五巻は初稿が完成していた(第四巻は未執筆)。

この時、氏は八十二歳という高齢だったので、陳舜臣さんは、文庫版の「訳者あとがき」で、全五巻の「一日も早い完成を祈らずにはいられない」と記されている。

維基百科などで調べてみたが、『李自成』の、以後の執筆は確認できなかった。そしてまた、陳舜臣・謙臣ご兄弟の第二巻以後の翻訳もなし。

第九章「『李自成』をめぐって」補足

(p.51)

シャー・ジャハーン帝は(アウラングゼーブに)屈服し、アグラ城の一室に死ぬまで幽閉された。

息子に強いられたこの退位は1658年のことで、シャー・ジャハーンの死は1666年である。

アグラ城の彼の部屋からは、最愛の妻を葬ったタージ・マハルが見える。月夜に夢のようにかがやくドームが廃帝の心をどれほど揺りうごかしたであろうか。娘のジェハナラ・ベガムに看護され、八年の幽閉生活の幕を閉じて、彼は妻のねむるそのタージ・マハルに葬られたのである。

講談社文庫版『インド三国志』から抜粋引用します。



手前アグラ城、遠くにタージ・マハルが見える

第十三章「『インド旅行にて』補足